

学部・研究科	学生参加のあり方
経済学部	学生代表者（FEELスタッフを検討）に、アセスメント・ポリシーとその実施計画を提示し改善策を検討する
法学部	評価分科会に自治会の学生代表が参加
文学部	別紙
経営学部	学部自治会の代表と、経営学部企画のメンバーに趣旨を説明し11月に学生参加の自己点検委員会を開催
教育学部	別紙
理工学部	検討中
看護学部	別紙
国際教養学部	別紙
経済学研究科	検討中
法学研究科	検討中
文学研究科	検討中
工学研究科	検討中
法務研究科	検討中
教職研究科	別紙

2018（平成30）年度 第1回 学部自己点検評価委員会議事録

<日 時> 平成30年7月20日（金） 午後0時30分～1時00分

<場 所> 中央教育棟10階文学部長室

<出席者> 浅山学部長、杉山副学部長、金子教授、玉井教授
オブザーバー 足立事務長

<審議事項>

- 1 アセスメント・プランに基づいた学習成果測定方法の再検討について
浅山学部長より、標記の件について審議したいとの提案があり、審議の結果以下の通りに決定した。
 - ① 来年度は、カリキュラムマップを履修要項に掲載する。
 - ② シラバス入力の際に確認できるように、ラーニングアウトカムズを添付する。
 - ③ ルーブリックを提示し、学生に回答させる。
 - ④ 本年度の専門科目アセスメント・プラン（案）は、別紙の通り修正する

- 2 学生参加のあり方について
浅山学部長より、標記の件について審議したいとの提案があり、審議の結果以下の通りに決定した。
 - ① 学部自己点検委員会に学部協議会の学生の委員を構成員（オブザーバー）として加える。
 - ② 学部自己点検委員会の議題の中で、とくに「学生支援」及び「成績評価」に関わる項目について学生委員の発言を求める。
 - ③ この制度は、2019年度からスタートすることとする。

学部長 _____ 印

認証者 _____ 印

認証者 _____ 印

教育学部における学生参加のあり方について

1. 内部質保証に関する教育学部の現況

内部質保証の視点から見たとき、教育学部における学部教育の現状は、おおむね以下のとおりである。

- ラーニング・アウトカムズ (LO) は整備されている
- 各授業科目を LO の各項目と対応づけるカリキュラム・マップは作成されている
- 教員・学生に LO 及びカリキュラム・マップが周知されてはいない

つまり、それぞれの科目が DP や CP のどの部分を担っているかという絵は一応あるが、現実に学生がそれぞれの科目や、それらの集合体としてのコース・カリキュラムによってどういう力をつけているのかについては、検証できていない状況にある。したがって、PDCA サイクルで言えば、まだ D の段階であると言えよう。

ただ、教育学部では教職課程登録者が多く、それらの学生は免許法に定められた多くの科目を順に履修するため、個々の授業科目によって得られる力に対する意識は低い傾向にある。こうしたあらかじめ定められたコースにおいても、LO を意識した履修を目指していけるようにしたい。

その一方で、一つの学期に多くの科目を履修することにより、学生に対する課題の負担が増し、結果的にそれらをこなすことが目標となってしまい、一つ一つの授業に対する学修が深まらないという指摘も挙がっている。LO を意識することにより、単なる量的な負担感を克服し、カリキュラム全体のなかでの位置づけを意識した、より深い学習も可能となるであろう。

2. 教員組織側からの検討

一方、AP 事業の進展とともに、AL マスター教員を中心として「AP 事業推進委員会」が組織されている。主に若手教員からなる同委員会では、授業内容及びカリキュラムの改善をめざし、授業見学や同僚会議などさまざまな FD 活動を展開している。

そうした活動の中で「科目担当者間の連携が不足している」との認識から、教育学系、心理学系、教科教育系といった同一分野の教員が集まって、授業内容に関して連携を深めたり、共通の教育内容への認識を深めたりする動きが実現してきている。また、「汎用的能力の育成について学期間のつながりを検討する機会がない」との指摘も出ている。

こうした改善活動を通して、学生に提供する授業科目間及び学年間・学期間の教育内容に関して有機的なつながりを増すとともに、課題の集中を避けるようなこともできるようにしていきたい。

3. 学生組織の現状

教育学部では学生自治会や学部企画の活動が盛んで、両組織の執行部と学部長、副学部長を構成員とする「学部定期協議会」を不定期に開催して、さまざまな意見交換をしている。そう頻繁に開かれるわけではないが、設備等のハード面だけでなく、授業を含む学生に対するさまざまなソフト面の問題についても広く学生側の意見を聴取する機会となっている。

また、教員と学生が一堂に会し、さまざまな教育的問題について自由に話し合う場として「教育学部未来プロジェクト」と呼ばれる集会在年に2回ほど、数年にわたり開催されてきているほか、オープンキャンパスも学部企画と教員が共同して運営している。

このように、これまでも教員と学生が協働する場は多く、今後もこのような関係は継続していくものと思われる。

4. 教育学部における学生参加

こうした状況を背景として、今後学習成果を可視化して内部質保証を行っていくに当たっては、まずは「AP 事業推進委員会」における教員による協議の場に、既存の学生組織の代表もしくはFD用に新たに各学年で選ばれた学生たちを招き、現状に対する学生側の声を聴き取るとともに、協力して改善活動に当たることが可能であると思われる。そのため学生の代表のあり方について、学生組織と早急に話し合いを持ちたい。

また、LOに基づくカリキュラム・マップについても、今後はガイダンス等を通じて学生たちに周知させ、上記学生FD組織の声も聞きながら、学習成果の可視化やカリキュラムの点検・見直しに大いに役立てていきたい。

看護学部自己点検評価活動

①分科会委員

中泉、大釜徳、佐々木、鈴木恵、長沼、本田、(以上教授 6 名)、藤田、東森、西尾、(以上准教授 3 名)、竹内事務長、計 10 名

②前年度分科会実績(日時、参加者、議題)

第 1 回看護学部評価分科会

日時:2017 年 5 月 10 日(水)19:05~(学部教務委員会終了後)

場所:事務室会議室

参加者:中泉、大釜徳、鈴木恵、長沼、本田、佐々木、志村、藤田、東森、西尾

議題:5/9 に開催された全学自己点検・評価委員会を受けて、2017 年度 看護学部評価分科会評価委員を決定した。(学部教務委員が委員となることを学部長が提案し、承認された。)

第 2 回看護学部評価分科会

日時:2017 年 11 月 10 日(金)19:20~(学部教務委員会終了後)

場所:事務室会議室

出席:中泉、大釜徳、佐々木、鈴木恵、長沼、本田、藤田、東森、西尾

欠席:志村

議題:看護学部アセスメントポリシー案を学部長が提出し、審議した。今後 1 週間メールなどで意見を受け付け、メール審議での上、11/21 全学企画調整室に提出することで承認された。(原案通り承認された。)

③今年度実施計画

本年度も、全学からの課題など、必要に応じて評価分科会を行う予定である。(本年度も分科会評価委員は、学部教務委員が兼務することになった)

看護学部アセスメント・ポリシー(案)に関しては、6/6 の第 2 回分科会にて協議を行い、その協議結果をもとに、6 月度学部教授会を経て、公開の運びとする予定である。

学生参加型の内部質保証に向けた取り組みに関して、5/9 の第 1 回分科会にて協議を行い、5 月度学部教授会にて、学部協議会を分科会での内部質保証システムの中に位置づけることを報告したところ異論は無かった。

現在、カリキュラム検討委員会にて、学部アセスメント・プランに準じたアセスメントを実施・検討している。これを、新カリキュラムおよび次年度に活かしていけるようにする。

創価大学自己点検
第2回全学自己点検
評価委員会
国際教養学部

Content: 学生参加のあり方について

The following report is based on a meeting with the Faculty of International Liberal Arts Student Executive Committee on July 17, 2018.

Proposal

According to the FILA Student Executive Committee, an effective way to gain student input into the faculty evaluation system is a questionnaire administered through Google Forums. Students are familiar with the format and have access to Google operations via the University system.

Sample questions suggested by students (and faculty) include:

- a. **Diploma/Curriculum Policy***
 - i. In name of class/activity/study abroad, I had multiple opportunities to gain knowledge, skills, attitudes related to the following goals and objectives of the FILA program.
 1. Develop advanced English language skills to conduct academic writing, discussions and presentations
 2. Develop cross-cultural understanding to collaborate with individuals from diverse cultural backgrounds
 3. Develop skills in quantitative/qualitative research methodologies
 4. Acquire academic knowledge across the fields of humanities and the social sciences
 5. Develop critical thinking and analysis skills through reading, writing, discussion and presentation
 6. Identify issues and work towards solutions
 7. Conduct directed research based on knowledge from across the fields of humanities and social sciences
 - * Responses will be based on a 5-point Likert Scale: 5 Strongly Agree...1 Strongly Disagree.
 - ii. Please provide specific examples of the opportunities you had in name of class/activity/study abroad to gain the knowledge, skills and attitudes stated above.
- b. Please describe one of your favorite memories/experiences in the FILA program.
- c. Please describe your greatest challenges during the FILA program.
- d. What suggestions would you offer to improve the FILA program?

自己点検・評価報告書：学生参加のあり方について

教職大学院自己点検・評価委員会

教職大学院では、2011年12月の研究科委員会において、2012年度以降の秋学期開始頃に、自己点検・評価の一環として、院生と教職員による「教職大学院を語り合う会」（以下、「語り合う会」）を毎年1回実施することになり、現在まで継続している。今年度は、9月19日(水)の16時半からの開催を計画している。

その目的は次の通りである。○教職大学院の在り方について院生の視点からの意見を聞き、今後の教職大学院のあるべき姿を探るための参考意見を得る。○本学教職大学院の課題や修正すべき点について教職員と院生が話し合うことにより、改善点を見出すための機会とする。

秋学期の開始頃としているのは、いくつかの理由がある。まず、春学期の授業アンケートに基づいて実施するためである。次に、この点に関連して、1年間しか在籍しない現職教員院生も春学期の経験をふまえて意見を出してもらうためである。また、提案された意見のすべてが来年度からの実施ということでは、修了予定者は「語り合う会」の意義・効果を確認することができないため、すぐに行えることは秋学期から早速実施に移すことができるようにとの意図に基づく。加えて、秋学期は「実習研究」で毎日のように実習校へ行く院生が多く、そうした院生も参加できるようにとの配慮によるものである。

時間的には、1時間半程度、教職大学院棟の教室で開催している。7月中と9月にメールで開催案内をし、参加を呼びかけている。

「語り合う会」では、交流・懇談を基調として結論を出すことを前提にはしていない。話し合いの内容については、その概要を記録し、研究科委員会の報告事項で報告することを原則としているが、必要に応じて審議事項として取り上げる場合もある。

授業アンケートに基づきつつ、院生と教職員が顔を合わせて協議することにより、信頼関係を築きつつ具体的な改善に向けて対応を検討することができ、有意義な機会になっている。現在の「語り合う会」を継続しながらも、自己点検・評価における学生参加のより良いあり方を探っていきたいと考えている。